

信友

信友会事務局

東京都新宿区本町8-2
住友生命四谷ビル
電話 080-4816-3202

創立五十周年記念行事盛大に実施

総会及び合同歓送迎会を拡大した五十周年記念事業は、平成二十六年二月二十三日(日)に「第一ホテル東京」において盛大に行われました。

牛山元信友会長及び宮崎防衛装備工業会電子部会長の祝辞を頂きました。

また、永年にわたるご協力に感謝し、愛日、九段社、通信団、及び陸上幕僚監部通信電子課の四団体に会長から感謝状を贈呈しました。

引き続き、梯久美子氏による記念講演が執り行われ、三百六名の会員・現役自衛官等が聴講し、大変な好評を博しました。

その後、祝賀懇談会が行われました。約二時間の会は、信友会員・現役隊員・信友会支援企業等の皆様の参加を得て、盛大かつ成功裏に実施することができました。

中方地区懇親会実施

信友会の地区懇親会は、毎年、方面通信群の記念行事祝賀会食等の場を借りし、平成二十六年は、中部方面通信群創立五十周年記念行事に併せて信友会創立五十周年記念事業の一環として、平成二十六年三月二日(日)伊丹駐屯地内において行いました。

中方地区の信友会員九名、他方面からの信友会員三十三名(うち役員十二名)の計四十二名の皆様が参加しました。丹間通信群長への記念品の贈呈、信友会創立五十周年記念事業等の説明や意見交換等を行い、現役隊員及び招待者も一緒に、久しぶりの再会に大いに語り合い、懇親の実をあげました。

これからの信友会 について思うこと

会長 菊池 伯



全国の信友会員として現役の通信科幹部の皆様におかれましては、お元気で新年を迎えられたことと拝察いたします。

厳しさを増す我が国周辺の安全保障環境への対応として、新大綱や中期防を受けて開始された防衛省・自衛隊の大改革が、漸くその実りの姿を現し始めております。陸上自衛隊については、大きく陸上総隊、水陸機動団、即応機動師団・旅団の三点が主要検討テーマであるという風に、よくいわれております。が、私は、もう一つ、主要テーマと位置付けるべき問題があるかと思っております。それは、指揮・連絡・情報のための通信・システムをどうするかということであり、当然ながら担当正面上においては懸命に検討されているところでありまうが、主要テーマとして列挙されない分、他の三点に比べて軽視されているのではないかと、この老練的危機感があります。企業の一員として深く関与されているOBもいると思いますが、その他の通信科のOBとしても、これこそが心してチェック・研鑽すべき重要なテーマであろうと思っております。

今般、この機関紙とともに記念事業として作成したDVDを会員の皆様の手元にお送りしましたが、一部方面における地区懇親会を除いて、これをもって一昨年来の一連の五十周年関連事業の締め括りとさせていただきます。この間、御理解・御協力を賜りました会員各位に厚く御礼申し上げます。

次の五十年への新たな一歩を踏み出すにあたり、「諸活動を通じて会員相互の絆を深め合う」という信友会設立の趣旨の更なる具現のため考えていることを、二、三点述べさせていただきます。

第一は、会員の構成が、二佐以上に偏重していないかということです。会則上、会員資格に二佐以上とあるものの、C・CGS修了者などという規制は毛頭ありません。しかしながら私が就任して以来、何度となく、「そういつた暗黙の認識がある。だからその他の人は加入しない」という話を耳にしております。役員の側にそういった誤解を招くようなやり方があるとするは反省しなければなりません。私は、五十周年の祝賀行事の実施に当たり、

何人かの佐官以外の方に声をかけてもらい、会員に加入していただくとともに祝賀行事にも参加していただきました。変な負担感もなく階級差もない中で皆で楽しみながら絆を深めるという信友会設立の趣旨を広く周知し、加入会員の増加を図っていくべきと考えます。

第二に、地区懇親会の活性化についてです。現在、方面通信群の記念行事に合わせ、順に地区懇親会を実施しておりますが、もう少し賑やかに実施できないものかと常々思っております。部隊OB会との競合や信友会員としての関与の度合い・メリット等を考えれば現状を理解できないこともないのですが、地方といえども通信科部隊等は複数あり、部隊OB会を超えて通信科OBとしての情報共有し、かつ絆を深め合う意義は大きいと考えます。是非、負担感・拘束感の少ない信友会に沢山の方に加入していただくとともに、数年に一度の懇親会には奮って参加していただき、部隊OB会を超えた旧交を温めていただきたいと思います。

第三は、合同歓送迎会の出席者についてです。会員の援護企業や防衛装備工業会電子部会員に加え、昨年は、電子部会の各企業のはから陸上自衛隊通信に長く携わった員と沢山の思い出を共有する自衛隊OBの方も御案内いたしました。援護業務への寄与、通電関係企業への理解の増進と意見交換の意義、自衛隊・企業双方のOB同士の親睦、陸上自衛隊通信の歩み・伝統の継承、他の職種OB会の状況等を勘案してのことでしたが、極めて有意義であったと認識しており、今後とも継続したいと考えております。

五十周年総会・合同歓送迎会のご案内

信友会五十周年記念の総会及び合同歓送迎会を左記のとおり実施します。

年一度の懇親の場です。大いに懇親の実をあげていただきますようお願い申し上げます。

記

一日時

平成二十七年二月二十二日(日)

(一) 総会 十一時〇〇分～十一時五〇分

(二) 合同歓送迎会 十二時〇〇分～四時〇〇分

二場所 第一ホテル東京(前年と同じ)

新橋駅(JR・銀座線・浅草線)から徒歩五分

電話 〇三三五〇一四四一

住所 東京都港区新橋一丁目一六

三 会費 九、〇〇〇円(当日受付にて頂きます)

【お願い】

出欠については同封のがきでご返信ください。

51周年総会・合同歓送迎会

信友会五十周年記念の総会及び合同歓送迎会を左記のとおり実施します。

野外通信システムの時代に向けて

通信学校長 陸将補 成田 千春



学校長として着任して約一年半が過ぎようとしていますが、最近のシステム通信を取り巻く環境から、通信科隊員として期待することとして、「陸上自衛隊のシステム通信全体を考えた

任務を完遂せよ」七つの連携：すべてはユーザーのために」と話しています。七つの連携とは①信務・電話・搬送・無線の通信主要特長②基地通信と野外通信③通信科通信と部隊通信④ネットワークとシステム⑤陸自通信と統合通信⑥通信運用と通信補給整備⑦通信部隊とシステム通信関連企業であり、これらの連携なくしては、我々通信科職種は任務を完遂できないと思います。

野外通信システムは、今年度から学校、各部隊に逐次導入されていますが、その特性を考えるとこれらの七つの連携がますます重要になってくるものと思います。

野外通信システム導入後の師団指揮所地域、連隊指揮所地域には、アクセスノードと呼ばれる装置を中心に、野外ルータを経由して、野外電話端末、指揮所情報端末等の各端末装置が設置されます。アクセスノードを担任する班(組)は、搬送特長の陸曹を組長とし、無線、有線特長の混成編成であり、従来の単一特長による班(組)編成とは根本的に異なるものであり、通信職種主要特長間の連携が極めて重要であり、学校における主要特長教育も見直していく必要があります。また、連隊指揮所地域においては、通信科部隊が担当するのはアクセスノードまでであり、野外ルータの設定、各端末装置の設置は連隊通信小隊の担任であり、通信科部隊と部隊通信(連隊通信小隊)の連携なくしては、師団長と連隊長の通信確保は困難となります。現在、通信科隊員の教育は通信学校で、通信科以外の隊員の教育は、幹部は各職種学校で、陸曹は陸曹教育隊で実施していますが、通信科部隊と部隊通信(連隊通信小隊等)がほぼ同一の装備を保有する時代においては、通信学校と各職種学校、陸曹教育隊との連携がますます重要であり、練度の均一な向上が必要となってきます。

ネットワークとシステムとの関係を見ると、現状においても平素駐屯地で使用している陸自指揮システム、補給管理システムを訓練・演習等で駐屯地外に展開していますが、この際にも固定通信組織を維持・運営する基地

通信部隊と野外通信組織を構成・維持・運営する野外通信部隊が連携しています。また、指揮システム等の野外展開に伴う伝送路、端末設定の変更等に際しては、DIIを管理する統幕、統合通信部隊との連携が必要です。更には、システムの基盤となる固定通信網の維持・運営においても陸・海・空各駐屯地・基地通信部隊が連携・協力して実施しています。今後、対空戦闘指揮統制システム、火力戦闘指揮統制システム等各種戦闘指揮統制システムの導入が進むと、野外通信システムから基地通信組織を通じて海・空自衛隊の各システムとの連携も必要となり、基地通信と野外通信、ネットワークとシステム、陸自通信と統合通信の連携がますます重要となってくるものと思います。

通信運用と通信補給整備、システム通信関連企業と通信部隊との関係においても、現在も陸自指揮システム、補給管理システムの維持・管理は基地通信部隊と維持管理会社等が連携して実施しています。今年度から導入される野外通信システムのアクセスノード等の主要装置は従来のシェルター搭載型から車両一体型へ、また、無線装置はシングル装備となっており、車両故障、無線機障害が装置全体へ影響を与えるため、平素の予防整備はもちろんのこと、車両、無線機等の故障発生時には速やかに復旧できるよう使用部隊と整備部隊が緊密な連携を図る必要があります。



野外通信システム

如何に時代が変化しても、如何に技術が進歩しても、我々通信科の役割は作戦・戦闘を支援することであり、ユーザーサポートを第一義とすることは変わりなく、今年度から導入される野外通信システムの能力を最大限発揮するためにも、七つの連携を重視しつつICT時代にふさわしい逞しい人材の育成に努力していきたいと思っています。

通信団創立五十五周年を迎えて

通信団長 陸将補 西川 公康



信友会会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。また日頃、私ども通信団に對し多大なご支援・ご協力を賜り、通信団全隊員を代表して心より御礼申し上げます。

さて、会員の皆様も御承知のとおり平成二十五年末に閣議決定された「二五五」及び「二六中防」に基づき、陸上自衛隊は「即応機動し得る陸上防衛力」を構築するため、陸上自衛隊創設以来の大改革に着手し、体制整備を強力に推進しているところです。主要な事業としては、陸自の中央指揮機能の強化として「陸上総隊(仮称)の新設」、これまで平素陸上戦力の空白地帯であった「南西諸島への部隊配置、機動展開能力の向上を狙い」とした「師団・旅団の改編」、水陸両用機能の整備として「水陸機動団(仮称)の新設」の他、重層的な情報収集手段の保持及びデータリンクの強化、野外通信システムの整備などの「情報・通信態勢(体制)の強化」が重視事項となっています。そのような中、通信団の体制強化についても、現在陸上幕僚監部と連携して鋭意検討を推進しているところであります。

さて、通信団は本年度創立五十五周年を迎えることとなりました。そこで、これを一つの契機として諸先輩の皆様が営々と築かれた輝かしい歴史と伝統を継承し、先程申し上げました陸自の体制改革の中で、「新生通信団の創造」を目標に通信団全隊員が一丸となって努力して

いくことを祈念して、隊員から様々なアイデアを募集し五十五周年のキャッチ・フレーズとロゴ・マークを作成しましたので紹介させていただきます。

先ずキャッチ・フレーズですが、主任務であるシステム・通信を常統的に繋ぎ(構成・維持・運営)とともに、通信団の伝統を受け継ぎ、未来に飛躍していくとの想いを込めて「繋ぐ未来「Go! Go! 通信団」」とししました。また、ロゴ・マークは通信団のシンボルでもありますが通信鉄塔をモチーフとしてそこから発射される電波(Signal)を「55」の数字にアレンジしたものとしました。

本年度限りのキャッチ・フレーズとロゴ・マークではありますが、現在通信団本部が所在するフロアに掲示しておりますので、通信団へお越しの際には是非ともご覧いただきたいと思っております。また、平成二十七年二月に「通信団創立五十五周年記念行事」を計画しております。歴代団長はじめ諸先輩方並びに通信団の活動に深いご理解とご支援を賜っております関係協力団体の皆様にご参加いただき、私ども現職隊員に對し激励とご教導をお願い申し上げます。



通信団創立55周年記念キャッチ・フレーズ及びロゴ・マーク作成者

通信電子部長着任にあたり

補給統制本部通信電子部長

一等陸佐 奈良岡 信一



信友会の皆様には、補給統制本部通信電子部に対し、常日頃から暖かいご支援・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

第九代の通信電子部長に就任しましたが、歴代の通信電子部長をはじめ諸先輩方の弛まぬご努力により築かれてきた輝かしい伝統と実績を有する通信電子部で勤務できることは誠に光栄であり、また、陸自補給整備業務の中核としての役割を担う重責に、身の引き締まる思いであります。補給統制本部での勤務は、初めての経験でありましたが、部隊として陸上自衛隊のためにその役割を十二分に果たせるよう部下隊員とともに奮闘努力いたしますので、皆様には、引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

さて、自衛隊を取り巻く環境は、近隣諸国の我が国周辺における活動活発化、大規模震災の発生恐れ及び異常気象による災害などいつ何が起こることも限らない事態にあり、それに対応するため、今に即応し明日に備える態勢を保持するとともに、いざ出動の際には、継続して作戦を遂行できる基盤を確立しなければなりません。

私は、前職、東北方面通信群長でしたが、今後発生する恐れがある大規模震災等への対応には、東日本大震災の教訓事項を踏まえ、初動対処通信や通信障害対処を重視して取り組みました。その際、一般的に着意すべき事項としては、まず優先して初動対処部隊が使用する全ての器材を継続して良好な状態に保持し、主力部隊の器材も定期整備での不可動分を除き、いつでも使用できる状態にしておかなければなりません。また、整備中の器材は、野整備部隊と密接に連携して、運用上の優先順位に基づき早期に整備を終了させ、現用器材の故障の際、直ちに対応できるようにすることが重要です。

このような認識の下、通信電子部長に着任しましたが、整備に関しては、交換部品等が既に製造中止、或いは部品製造に長時間を要するなど、長期間不可動状態となっ

ている器材が少なくないことを確認し、今後、部隊運用や訓練等に影響を及ぼさないよう、可動率を向上し得る整備要領の確立が喫緊の課題であると強く認識しました。また、補給に關しては、現用の師団通信システム及び各種機能別無線機の後継として整備した野外通信システムのうち、平成二十四年度末から広域域多目的無線機が、平成二十六年度末から骨幹装置及び端末装置が逐次導入されますが、部隊の戦力化に影響を及ぼさないように関係部署と密接に連携し整備と部隊等に納入することともに、整備実施規定を早期に確立し、不具合発生の際、迅速に対処し得る態勢を整えておくことが肝要であると認識しました。

最後に、より効率的・効果的な補給整備業務を遂行するためには、前述のほか、色々な課題を克服することが必要ですが、その際、関係通信事業者のご支援・ご協力が必要であり、また、信友会の皆様にも、ご意見やご助言を賜りたいと思いますので、重ねて、お願い申し上げます。



通信電子業務促進会議時の部長講話

自衛隊指揮通信システム隊

のご紹介

C4SC司令 一等陸佐 菅野 俊夫



先ずは、「信友」読者の皆様に対し、自衛隊指揮通信システム隊(JSCDF C4 Systems Command)以下、C4SCを紹介する機会を頂けたことに御礼申し上げます。C4SCは、平成二十年三月二十六日、統合幕僚監部(以下、統幕)指揮通信システム部(以下、J6)内の二コ室一コ班を基幹として創設された比較的新しい部隊です。主たる任務は、防衛情報通信基盤(以下、DII)及び中央指揮所の維持管理並びにこれらに關するサイバー攻撃等の対処であり、隊本部、ネットワーク運用隊、保全監査隊及び中央指揮所連通隊を創設当初の編成とし、平成二十六年三月二十六日には保全監査隊が廃止、サイバー防衛隊が新編されて現在に至っています。

所屬隊員は、陸上・海上・航空自衛官及び事務官等約二百名であり、職種・特技も通信だけではなく、システム・電計職域を始め、幅広い分野の要員が揃っています。それだけに、用語が通じない、業務・行事のやり方が違うなど異文化交流による日々新たな発見(？)がある一方、ほぼ毎月ある人事異動(！)に伴う各幕・各自衛隊との人事調整、特に、要員・人材の確保・育成・管理には苦心しているところです。

また、C4SCは、統合通信部隊として統合運用のための指揮通信システムを一元的に担うと思われるかもしれませんが、部隊設立当時の諸事情から統幕J6の所掌業務の一部を移管されたのみであり、通信団を始め各自衛隊通信部隊との連携が必要不可欠な点は変わっていません。(真の統合通信の道は遠い？)

さて、目下の隊の業務の焦点は、平成二十六年度末のDIIクロス系換装及び平成二十七年年度末の中央指揮通信システム(CCS)換装事業への対応、そして、新編されたサイバー防衛隊の戦力化です。サイバー防衛隊は、各種脅威からのDII等の防護・対処に加え、情報収集・共有、技術支援、調査研究、訓練という新たな任務を付与されており、必要な能力の確立・強化に取り組んでいます。「サイバー」という言葉が時代のキーワードとなり、皆様の関心が高いことは非常に有り難い反面、過剰な期待を抱かれている感も否めず、悩ましいところです。(一番の課題は人材育成！) 情報通信技術(ICT)・製品・サービスの進展・普及に伴い、活動基盤かつ作戦領域と位置付けられるサイバー空間の利用の安全を確保し、コンピュータ・ネットワークの最大活用を図ることが求められている昨今の状況に鑑み、益々高度化・巧妙化するサイバー攻撃への適切な対応は極めて重要な課題と認識しています。C4SCとしては、与えられた崇高な任務と責任を自覚し、誇りを持ってその遂行に全力で取り組んで参りますので、今後とも皆様のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

自衛隊指揮通信システム隊



温故知新

東北方面通信群長 一等陸佐 木下千敏志



仙台駐屯地は、宮城野区南目館(みなみのめたて)というちょっと聞きなれない場所にあります。宮城野区付近のこの地域は、かつて広大な原野が広がり、その原野は宮城

野と呼ばれておりました。萩の花が咲き乱れる美しい野原で、古今和歌集に「宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つこと君をこそ待て」とも詠まれているほどに、名所として知られていました。

奈良時代には宮城郡が制定され、国府が置かれると各地との間に官道が作られ人の往来が盛んになり、諸所に警備のための「砦」が設置されました。源頼朝の奥州征伐以降、三十五に及ぶ警戒のための砦を基にした支城が置かれ、その中の一つが南目館で、南方にある目付け所に置かれた「館」ということでこのように呼ばれたという説があります。

駐屯地の最も近傍の駅が仙石線の「苦竹(にがたけ)」駅ですが、この地名の由来もいくつあります。その一つが、その昔この付近には真竹が生い茂っていたそうで、真竹は湯がいて食べないと苦くて食べられないのですが、そのために苦竹と書いて「ただけ」と呼んだという一説があり、それに因んで苦竹という名が残ったということです。

昭和二十年八月、この駐屯地に米軍が進駐した当時は「キャン・シンメルフェニヒ」(米軍将校の名)という名称でしたが、通称「キャン・ニガタケ」と呼ばれていたそうです。

明治時代には仙台上に東北鎮台の司令部が置かれ、宮城野一帯には広大な練兵場が設けられ陸軍の演習などが盛んに行われておりました。ただし今の仙台駐屯地あたりは練兵場のはずれで広大な水田地帯であったそうです。仙台出身の著名な陸軍軍人では、「今村均」大將がおられます。

今村将軍は、北仙台駅から徒歩で約二十分程行ったところの東北の中でも回遊式庭園があることで有名な「輪王寺」というお寺に眠っており、今もお将軍を慕う人達が絶えることなく訪れております。このような土地柄であるが故に今村将軍のような包容力のある方を生み出したのだらうと、この地に暮らして理解できるように

なっております。

東北方面通信群は、昭和三十五年一月東北方面通信隊として創設以来、このような素朴で美しい風土の中で育まれて参りました。隊員の八割以上が東北出身者で占められていたこともあり、郷土への愛着や誇りがとても強く、純粋で熱々と働く隊員達ばかりです。

通信群の隊舎の前には、仙台駐屯地でも随一と言われ「静勝園」というそれは見事な庭園があります。この庭園は昭和四十七年、当時の群長藤田一佐の時代に造成され、以後昭和五十二年、加茂群長の時代に改築・完成に至りました。

「静勝」の由来は、「静」とは正なり整なりまた静なり、そして勢を意味する。即ち十分な準備を整え、その兵勢を得て勝ち易きに勝つを「静勝」と云う。というものです。今もなお東北方面通信群には、この精神が脈々と受け継がれ、生き続けております。

今現在東北方面通信群で勤務する私達は、今もそしてこれから先輩の方々が熱い思いで築き上げてこられた輝かしい伝統を守り、更に新たな風を吹き込み、新たな伝統を造って参りたいと強く思っております。

今後、信友会の多くの皆様が仙台駐屯地、東北方面通信群にお越しになられる折には是非ともこれらのことを含めて楽しんでいただければ幸いです。



静勝園の雪景色

陸上自衛隊通信電子の現況

陸幕通信電子課

一 はじめに

我が国を取り巻く新たな安全保障環境の下、平成二十五年十二月十七日、今後の我が国の防衛のあり方について、「平成二十六年以降に係る防衛計画の大綱(二五大綱)」が閣議決定され、国家安全保障戦略(いわゆる「NSC」)を踏まえた今後の我が国の防衛の在り方について、指針が示されました。

今後の我が国の防衛力については、総合的な防衛体制の構築として、今回新たな用語として整理された「統合機動防衛力」を構築することとし、「実効性向上のための防衛力の「質」及び「量」を必要かつ十分に確保し、抑止力及び対処力を強化する」と記載されました。自衛隊の体制整備の重視事項の一つとして「指揮統制・情報通信能力」が掲げられ、「陸自の全国的運用の前提となる情報通信能力について、島嶼部における基盤通信網や各自衛隊間のデータリンク機能を始めとして、その充実・強化を図る」とされました。

また、平成二十六年四月一日、「防衛装備移転三原則」を策定し、防衛装備の海外移転に係るこれまでの政府の方針を改めて検討し、これまでの方針が果たしてきた役割に十分配慮した上で、新たな安全保障環境に適合するよう包括的に整理し、明確な原則を定めて防衛装備の海外移転の管理を行うこととなりました。さらに、平成二十六年六月、安全保障の主体性の確保、抑止力への潜在的な寄与及びバーゲニングパワーの維持・向上、先端技術による国内産業高度化への寄与を図ることを目標として「防衛生産・技術基盤戦略」が策定されました。

陸上自衛隊通信電子の分野においても、これらの制度環境の変化に適切に対応していくことが求められています。

二 主要通信電子器材等の整備

平成二十六年度は、野外通信システムの骨幹装置(アセスノード装置、バックボーンノード装置等)(第一師団、第二師団(一部)、第八師団及び第十二旅団等)、広帯域多目的無線機(通称「広多無」)(第一師団(一部)、第八師団及び第十五旅団)、等が逐次部隊に納入され、野外ネットワークの核として野外における情報通信基盤(ネットワークインフラ)を広く構築するとともに、平成二十四年度から導入が開始された広帯域多目的無線機により各部隊(ユーザ)が構成するネットワークを接続して部隊等が迅速かつ的確に情報の伝達・共有を行い、部隊等の通信機能の強化を図ります。(別図参照)

また、師団等指揮システム(第三師団)が導入されるとともに、主要な固定システム関連事業として、方面隊指揮システム(陸幕)の換装があります。

三 体制変換

平成二十六年度は、第一・第二・第三・第四・第六・

第八師団及び第十二旅団を改編して火力、対空戦闘能力、情報収集能力、通信機能及び施設支援能力を強化して防衛装備体制を整備します。

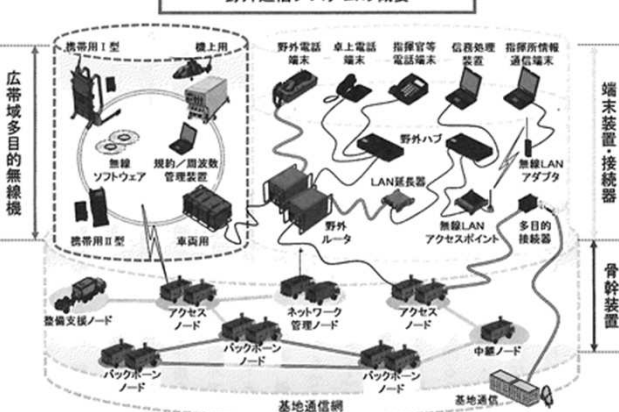
(二) 陸自通信部隊の改編

第一・第八師団及び第十二旅団の改編に伴い、師・旅団の通信機能を整備して、部隊のシステム通信基盤を強化するとともに、第三師団の改編に伴い各種戦闘機能の連携、情報の迅速な処理及び共有・一元化の能力を向上させます。

四 おわりに

防衛省においては、二五大綱及び中期防衛力整備計画(平成二十六年度～三十年度)(二六中期防)により、我が国の防衛態勢の強化を進めているところです。通信電子課としても、水陸両用作戦及び島嶼部を念頭にいた統合の機能強化や衛星通信を含む高度な情報通信ネットワーク及び優れた情報通信技術を活用した、より広範・機動的な情報通信態勢の構築等の検討について引き続き協力するとともに、陸自の野外ネットワークのインフラたる野外通信システム等の事業を更に推進し、陸自のC4ISR分野の充実発展に日々努力して参る所存です。信友会会員皆様のお一層のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

野外通信システムの概要



会員だより

マージャンと私

会員 中埜 和男(和童)



う。今、古希を迎え、「私にとってマージャンとは」を総括してみたいと思います。

私がマージャンを始めたのは通信学校のAOC入校のこと、FOC学生との対抗戦に参加するため、これがいいきっかけになりました。ついにマージャンで勝つための原則をマスターすること何十年も過ぎてしまいました。先輩・友人との交遊はわが人生を精神的に豊かにしてくれました。

マージャンを本格的に楽しんだのは陸軍器材班時代、三十五歳前後でした。目が回るほど忙しな中にもマージャンを楽しむ時間はありました。四十五歳後に器材班長として再び陸軍の陸軍に戻った時には、勤務時間が終わると、六本木の町で仲間達と地下鉄の終電ギリギリまでマージャンを楽しみました。たまたま終電を逃してしまっただけなのに、勤務場所に戻ると、深夜にもかかわらずバス残業中の班員がやさしく組立ベッドを準備してくれました。

マージャンの思い出の中で忘れられないのが一先輩です。一先輩は威厳が強く、その強さの秘密を聞き出しました。「弱い相手とプレイをする。」ということでした。さらに、「マージャンが好き。プレイが運がよい。負けると機嫌が悪くなる。金払いが良い。こういう人を誘えばいいんだ。」と教わりましたが、まさしくそれが私でした。

また、U先輩・K先輩とともに八十歳前後の大先輩で、まだまだ現役続中です。

この大先輩とお付き合いするメリットは、自分の十年後の姿をイメージできるということです。生き残ってマージャンを継続しておられる先輩達に身近に接し、優しくかつ厳しい指導を受けられるのは大いなる幸せであると思っています。

最近、大先輩達は、ガンと平然と付き合っておられるようで、一か月ほど呼び出しがなかった後、ジャン狂でお会いし、そのあたりを聞いてみると「胃がんで入院をしていたので、プレイができなかった。」と平然と言われます。そして、ダメになるまでマージャンを続けるのめと達観しておられるようです。

私はマージャンでは、残念ながら後輩を育てることはできなかった。こんなに面白い、不思議なゲームを後輩に伝えられなかったのが唯一の心残りです。

私がマージャンを始めるにあたってルールを教えた同期の連中、マージャンの厳しさと醍醐味を教えた同期の先輩や仲間達、そして何よりもマージャンを通じて人間の生き方を教え、導いてくださった大先輩方に謝して、現在までの小結としたいと思います。

信友会の思い出でと地方での活動

会員 川口 英徳



信友会とは昨年発足五十周年という大きな節目を迎え、尚一層、陸上自衛隊通信科の発展を支えつつ、通信科OBの心の拠り所として活動を継続していることは、誠に心強く通信科職種で勤務できたことを誇りに思っています。

信友会を初めて意識したのは、通信学校に勤務している頃だったと記憶しています。関東地区勤務時には信友会会員と現職通信科幹部参加の信友会行事にはほとんど参加しました。当時通信OBの中に企業を立上げその社長として、あるいは大手通信企業の重要な地位で活躍されている方が多数おおいになり、陸上通信を切り拓いてこられた諸先輩のご苦労、陸上通信の現状、課題等幅広く吸収する良い機会でもありました。あの現職とOBが一同に会し、通信の苦労を分かち合い、通信の将来を共に模索したことが、縦糸を切れ目なく半世紀にわたって原動力のような気がしています。

定年後は中央から遠いこともあり、西部地区懇親会に参加する以外はほとんど信友会諸行事には参加することなくなりました。幸い熊本には、西部方面通信群、第八通信大隊、第三〇一通信直接支援中隊が所在し、各種行事の折は勿論、所用で部隊訪問をする時案に立ち寄りさせていたのが機関紙「信友」でありました。年に一度の配布ですが、信友会の現況、通信科部隊の活動状況、現役四役の方々の顔ぶれと思ひ、更には陸自通信電子の現況・趨勢等多くの情報を承知することができ貴重な

機関紙で重宝しています。

早いもので私も六回目の年男、定年後十六年が経過しました。現在、熊本地区において、各地で勤務した通信仲間との懇親を図りつつ、熊本県防衛を支える会の会長として、また、肥後ちゃんかけごま保存会の会長として元気に活動中です。平成十八年十二月富士通系列会社を退職してからは、熊本県防衛支隊副隊長として、熊本市北部地区の支部長として、隊友で構成する国、県、市の防衛を重視する議員の後援会副会長として些かでもお世話になった自衛隊への恩返しが出来ればと思ひ、活動しているほか、熊本に古くから伝わり、熊本市指定無形文化財でもある伝承遊びの一つ「肥後ちゃんかけごま」を保存・伝承すべく、総合学習における小・中学校生徒の体験指導、県・市イベントでの演技、社会福祉施設・自治会等へのボランティア等趣味と健康管理を兼ね楽しく活動しています。

折角の機会ですので紙面をお借りし、熊本県防衛を支える会について紹介させていただきます。以前全国組織の防衛を支える会という組織がありましたが、平成十六年組織が解散して支援した参議院議員候補が惨敗したのを機に解散し、現在唯一、総務省に登録された政治連盟として活動しているのが熊本県防衛を支える会です。目的は、政治活動を通じて自衛隊の更なる発展と隊員の地位の向上を図ること、そのことにより我が国の平和と独立に些かでも寄与できればと活動しているところです。主な事業は、①憲法改正に向けた諸活動、②我が国の歴史、伝統、文化を育み、真に独立を目指すための諸活動、③防衛重視の政治家・候補者等の支援及び推薦、④防衛政策、駐屯地環境等の改善に関する請願、陳情、要望、⑤それらのための勉強会、講演会等の実施です。隊友会では、防衛・防犯・慰霊顕彰等公益的活動を展開していますが、防衛を支える会は隊友会ではできない政治活動(政治的主張、後援会活動、選挙運動等)を実施し、隊友会と連携しつつ、自衛隊の応援団として各種活動を展開しています。安倍政権が誕生して以来、国家安全保障会議の設立、特定秘密保護法の整備、グレイゾーン対処要領明確化、集団的自衛権容認の閣議決定等安全保障に前向きに取り組んでいますが、愈々、今まで一度もできなかった憲法改正に向けての動きが活発になってきました。当会では、再来年の参議院議員選挙を睨みつつ自衛隊の位置づけを憲法に明確にするためにも、日本会議等と連携、協力しつつ、チャラボスティング、署名運動等憲法改正に向けて地道な活動を開始したところで、熊本に在住する信友会会員も積極的に協力いただいているのは力強い限りです。

これからも、愛する自衛隊と郷土熊本との関わりをい

ただながら、通信という絆で結ばれた信友を大切に過ごしていきたいと思っております。

信友会発足五十周年と女性会員として

会員 松岡 裕子



私事ですが、定年後5年が経過し、当然のように還暦を迎えた平成二十六年(昭和八十九年、甲午)は、人生の節目に相応しい出来事が目白押しでした。初孫も誕生しました。

さて、五十周年の節目を迎えた信友会は、女性(婦人)自衛官の発足(昭和四十三年)より早く、通信科OBとしての結束や活動を開始していたんですね！

本年は昭和三十一年から五十年ということで、何かと五十周年がクローズアップされました。

例えば、東海道新幹線、東京モノレール開業・東京オリンピック開催、ビートルズ来日・日本武道館開館・オバケのQ太郎連載開始等々、懐かしい出来事ばかりですね！

ところで、この五十年間の間に女性会員は何人くらい存在したのかと調査(過去三冊分の信友会会簿を確認)したところ、現会員総数が千名以上いますが、女性会員は、なんと、なんと十名未満、たったの七名なのです(現会員は六名)。

確かに女性自衛官が定年を迎えた時期はまだ最近ですが、仕方ないことではあります。・・・

該当する通信科の女性自衛官OBの総数が何名かは分かりませんが、会員の割合が〇・一パーセント、あまりにも少なく驚愕の実態です。

全国に広がるこの「信友会」という心地よい結び付きの中に加わるといふことが見出だせないのかもしれない。現役時代から、年に一回ある信友会行事に参加する機会があるかどうかは、とても大切です。

OB側からも積極的に働きかける必要があると思ひます。現役の方も、退官された女性自衛官OBの皆様も、是非とも信友会へお出でください。

事務局だより

信友会は、五十周年記念事業関連業務を推進し、第五十一回総会・合同款送迎会準備及び会員の管理業務等を行ってきました。この間、各事業の推進に当たり、陸幕通信電子課、通信団、通信学校及び補給統制本部通信電子部をはじめとする現役の皆様、防衛装備工業会電子部会をはじめとする各企業の皆様及び全国の会員の皆様に、一方ならぬお世話になり、事務局一同深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

一 五十周年記念事業の推進

五十周年記念行事が平成二十六年二月二十三日(日)に「第一ホテル東京(新橋)」において、中地区懇親会が同年三月二日(日)に、伊丹駐屯地において行われました。また、本記念事業において作成したDVDを発送しました。

(一) 地区懇親会の開催予定(西部方面区)

五十周年記念事業の最後として、西部方面地区懇親会を西部方面通信群の記念行事に併せて平成二十七年三月三日(日)に行なう予定です。当日は、地区懇親会行事として、懇談会行事と祝賀会行事を予定しています。信友会への熱い思いの強い地区と聞き及んでおります。多数の会員の皆様のご参加をお待ちしております。

(二) 実行委員会の運営について

実行委員会は、五十周年事業の終了に伴い、二十六年四月及び同年九月に規模を縮小して、事務局役員とともに運営しております。引き続き、未実施及び未完了の事業の推進、成果報告書の作成等を実施していきます。最後まで、しっかりと仕上げたいと思っております。今後ともご協力の程よろしくお願い申し上げます。

二 信友会ホームページの維持

信友会ホームページを開設して約八年が経過しました。今後とも記事の適時の掲載・更新に努めてまいりたいと考えておりますので、ますますのご活用をお願い申し上げます。

三 事務局からお願い

(一) 通信等事務費納入のお願い
通信等事務費は、毎年の機関紙の発行、三年に一度の名簿の作成・発送等のため、隔年ごとに二千元を徴収させていただきます。未納入の方は、納入いただきたくよろしくお願い申し上げます。

(二) メールアドレス登録のお願い

信友会では、会員の皆様への慶弔等の重要な各種連絡をよりスピーディかつ確実に実施し、また、今後更に多様な連絡ができるようメールの活用を充実させて行きたいと考えております。このような趣旨から、これまでに、総会・合同款送迎会の出欠連絡の返信用はがきにメールアドレスの記載欄を設けてまいりましたが、

① 記載していただけた方が少ない
② せっかく記載して頂いても文字がはつきりしない等の理由から登録されたメールアドレスが極めて少数に限定されているのが実情です。

会員の皆様方におかれましては、趣旨をご理解いただき、是非とも記載していただきますようお願い申し上げます。

この際、より確実を期するため、記載に当たっては、たとえば「大文字・小文字の別」、「@スペースの有無」、「1(数字)とl(エル)の小文字」、「1」と「l」などの違いを明確に記述いただければ幸いです。

四 信友会役員紹介(※印 新任)

【会長】 菊池 伯

【副会長】 田中 達浩

【五十周年実行委員会(専任)】

長・今井 恵治

【総務】長・田辺 利明

長・佐藤 秀守・高橋 宏彰

長・特 嘉隆・長田 孝彦

長・進藤 進・栗池 雅彦

長・酒井 郁哉

【機関紙】長・松岡 裕子(五〇周年から転任)

長・吉永 春雄

長・白石 仁士・桐山 正昭

長・相澤 敦

長・小倉 良太・新居 久佳

長・濱口 浩衛

長・山中 隆義

長・山 中 隆 義

長・鮫島 茂広(会計から転任)

長・鮫島 茂広(会計から転任)

計報 謹んでご冥福をお祈り申し上げます

(H25.12.02~H26.12.01)

氏 名	逝去年月日	住 所
岡田 祥一	H08.09.02	埼玉県
柴村 友一	H11.12.28	埼玉県
大隅 克彌	H20.	神奈川県
鈴木 敏通	H20.03.15	神奈川県
新福 義尚	H21.01.19	埼玉県
渡邊 信二	H22.05.20	北海道
大橋 健太郎	H22.05.31	東京都
黒川 三男	H23.01.26	愛知県
岩木 英雄	H23.10.06	東京都
宮崎 三雄	H24.03.19	大阪府
村垣 良夫	H24.04.15	神奈川県
藤原 義雄	H24.09.14	宮城県
日高 徹郎	H25.01.10	宮城県
小崎 好一	H25.01.22	東京都
大工原 茂	H25.02.06	東京都
村上 保	H25.05.06	宮城県
石井 一雄	H25.05.30	北海道
笠嶋 英孝	H25.07.15	北海道
横尾 康弘	H25.08.05	福岡県
加藤 光	H25.10.	宮城県
藤田 正男	H25.10.	熊本県
小山田 晋	H25.10.11	北海道
平田 正興	H25.11.01	熊本県
山崎 進	H26.03.07	静岡県
佐藤 敦	H26.04.23	神奈川県
依田 文彌	H26.04.26	神奈川県
磯野 八郎	H26.05.	東京都
藤本 敬一	H26.05.19	埼玉県
寺嶋 和孝	H26.07.15	埼玉県
西森 幸男	H26.08.27	埼玉県
前田 敏棋	H26.09.30	熊本県
安成 季隆	不 明	東京都

平成26年度信友会会計報告

(H26.01.01~H26.12.31)

(単位:円)

収 入	支 出
前 年 繰 越	2,812,362
終 身 会 費	220,000
通 信 等 事 務 費	1,372,000
利 子	261
第50回総会賛金繰入等	19,554
寄 付 受	63,000
広 告 費	400,000
計	4,887,177
費 用	160,848
郵 送 等 事 務 費	125,794
印 刷 費	820,060
原 稿 料	56,380
地 方 交 付	100,000
50周年経費	347,584
手 数 料 等	73,510
次 年 度 繰 越	3,203,001
計	4,887,177

以上のとおり報告します。

信友会会計幹事

平成26年12月31日

宮崎 礼二

山中 隆義

監査の結果、異常ありません。

信友会 監事

平成26年12月31日

本田 徹

鮫島 茂広



合同款送迎会新入会員紹介

信友会新入会員名簿

(H25.12.02~H26.12.01)

氏 名	現住所	最終所属	退職年月日
今川 裕司	東京都	東部方面通信群	H21.01.23
松田 實	埼玉県	装束本通信電気課	H23.03.31
川口 恒美	東京都	東部方面総監部	H25.06.21
野沢 正仁	神奈川県	補給統制本部	H25.10.17
黒木 満春	千葉県	補給統制本部	H25.12.26
水谷 謙治	埼玉県	東部方面通信群	H26.01.21
小見山 雅	神奈川県	武山駐屯地業務隊	H26.01.30
内山 哲也	埼玉県	東部方面通信群	H26.02.15
内田 豊	神奈川県	通信団本部	H26.03.01
佐々木 盛也	埼玉県	補給統制本部	H26.04.11
橋本 精一郎	福岡県	第5施設団本部	H26.04.14
中野 弘之	東京都	通信団本部	H26.06.07
酒井 郁哉	埼玉県	通信団本部	H26.06.15
石本 和光	愛知県	第10通信大隊	H26.07.01
荒井 正	東京都	通信団本部	H26.07.16
陣内 紀匡	東京都	補給統制本部	H26.08.06
畑中 一男	千葉県	中基三隊	H26.08.22
増田 博文	奈良県	関西補給処	H26.09.14
高橋 豊	北海道	第72戦車連隊	H26.09.22
中屋敷 明彦	東京都	通信保全監査隊	H26.09.24
浪下 十四郎	埼玉県	通信団本部	H26.10.04
船木 國夫	埼玉県	システム防護隊	H26.10.19
舞原 博己	千葉県	通信保全監査隊	H26.11.21
片岡 博信	東京都	東部方面総監部	H26.12.01

平成26年叙勲おめでとうございます



瑞宝小綬章 川口英徳 氏 元通信補給処補給部長
瑞宝小綬章 阪 吉三 氏 元通信補給処副処長



瑞宝小綬章 猪狩正道 氏 元第1電子隊3等陸尉
瑞宝小綬章 西分幸夫 氏 元第1電子隊3等陸尉
危険業務従事者 内田将之 氏 元第1電子隊3等陸尉
危険業務従事者 中村直祐 氏 元北部方面通信群1等陸尉